

松本亨の虚像と実像：国際文化学的アイデンティティ分析の試み

武市，一成 / TAKECHI, Issei

(発行年 / Year)

2013-12-19

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第322号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2013-09-15

(学位名 / Degree Name)

博士(国際文化)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009299>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 武市 一成 |
| 学位の種類 | 博士（国際文化） |
| 学位記番号 | 第 534 号 |
| 学位授与の日付 | 2013 年 9 月 15 日 |
| 学位授与の要件 | 本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲) |
| 論文審査委員 | 主査 教授 高柳 俊男 副査 教授 川村 湊 副査 准教授 佐々木 一恵 副査 法政大学名誉教授 井坂 義雄 |

松本亨の虚像と実像—国際文化学的アイデンティティ分析の試み—

本論文は、戦後初期、日本放送協会の「ラジオ英語会話」など、もっぱら実用英語教育の担い手としてのみ知られる松本亨（1913～1979年）に対して、その思想形成期のキリスト教の影響から始まって、日米学生会議、渡米後の生活、日米交換船問題、日本人転住委員会での活動、戦後の占領期に果たした役割など、戦前戦後の屈折し激動する日米関係の狭間で生きた生涯を通して綿密な考察を加えた、本格的な評伝である。

章立てをみれば、第 1 章「松本亨とキリスト教」では、救世軍と日本基督教婦人矯風会に関わり、それゆえリベラルな面と禁欲的で保守的な面とが同居していた母親松本タマが、それに反発と思慕を抱く松本亨の人格形成に果たした絶大な影響力について論じている。その心情を読み解くに当たって、松本亨が 18 歳のときに書き、没後に出版された長編小説『おゝ雪よ！マイスノウ』も使われているが、登場人物たちと松本一家が符合してはいるものの、事実そのものではなく、あくまで松本亨の内面世界を読み解くためのテキストの一つと位置づけ、慎重に分析されている。キリスト者になった松本は、明治学院に入学し、またその延長線上で 1935 年以降、日米学生会議に二度参加していくが、時節柄、中国問題（満州問題）が最大の争点となった日米学生会議での議論と、記録者としての松本の役割や行動が検証されている。

第 2 章「超教派主義と『多様性の中での一致』」では、二度目の日米学生会議に参加した足でアメリカに留まり、神学校に通うことになった松本亨の、学生キリスト教運動（SCM）のなかで果たした主導的役割について明らかにすることに力点が置かれている。章の後半では時局がさらに悪化し、ついに日米開戦へと至るが、そのなかでの日本人収容、日米交換船問題と、帰国拒否を選択したことによる松本の日本人転住委員会での実務的活動、さらにそうした活動を行なうに至るシェーファー（戦前のフェリス女学院院長）との戦前戦後にわたる密接な関係などが分析されている。

第 3 章「アメリカの良心を写す鏡」では、戦時下アメリカ社会における松本亨の表象が考察の対象とされており、松本一家の所有する菜園が何者かによって荒らされたビクトリ

ーガーデン事件と、当時日本人としては珍しく英文で書かれ、封建的な日本の家父長制度のもとでの親族との確執を主題とする自伝的著作、*A brother Is A Stranger*（1946年；序文をパールバックが書いていることが注目される）を俎上に載せている。これらを通じて、松本亨はアメリカで一躍有名になるが、同時に日本からの「政治亡命者」で、「敵国人」でありながらアメリカの理念に共感を示す日本人松本亨という固定的なイメージが形作られ、アメリカという国の理想の姿を写し出す「鏡」としての役割を担わされていった事情にも注意を喚起している。

第4章「松本亨と戦後民主主義」では、1949年に松本亨を語り手として制作・発表された映画『*Toru's People*：日本の人々』や、1948年に「読売新聞」社長馬場恒吾との間に交わされた電話対談が検討の素材にされている。前章での*A brother Is A Stranger*にまつわる議論のなかでも、松本亨自身、戦後日本が進むべき新しい道について持論を展開し歓迎されたことが紹介されたが、民主主義とキリスト教を普及する宣教師として日本に派遣された松本亨に期待された役割が、冷戦構造の深まりのなかでの日本占領の「逆コース」や反共政策との絡みで分析され、松本亨は師のシェフアー同様、キリスト者として共産主義に否定的な心情を持っていたのは疑いないが、頑迷な反共主義者ではなかった、と推測されている。同様に、母校である明治学院で実践すべき教育計画の企画案として作成され、帰国直前に認定された松本亨の英文博士論文に対しても分析が加えられ、これからの日本の民主教育への阻害要因として、共産主義・権威主義とともに、自らにとって不都合な言論を規制している占領政策が挙げられたり、異宗教間交流が提言されていることなどが指摘されている。しかし、実際に明治学院赴任後は、図書館建設などに手腕を発揮はするが、学内政治に巻き込まれ、やがて学園を去り、また教会との関係も絶たれるに至る。

それらの考察を経て、第5章『英語教育者』松本亨』と終章「松本亨の虚像と実像」の前半では、一般的に「英語教育者」とみられている松本亨の、まさにその側面についての考察が行なわれる。日本においては、幕末から明治期に新たな制度や思想とともに流入してきた英語を研究する英学史と、辞書学や学校英語教育の変遷などを主対象とする英語教育史が研究の主流であるなかで、学問として軽視されてきた放送英語や実用英語の分野で果たした松本亨の役割が見定められている。とくにNHK「英語会話」テキストに掲載された読者からの投稿欄を活用して、この放送番組が当時の日本社会に果たした多大な影響力を跡づけている。「英語で考える」ことを持論にした松本だが、決して文法不要の単なる実用第一主義者ではなく、アウトプット（表現）のためにはインプット（読書）が欠かせないことを認識し、日本語の言語コードとは異なる英語の言語コードを自分の体内に別に構築することを主張していた。

本論文全体と同一のタイトルがつけられた終章「松本亨の虚像と実像」の後半では、これまで全5章でみてきた各論考を踏まえ、論者の理念や立ち位置によって様々に論じられる松本亨とは、実際いかなる人間であったかが論じられている。その際、在日コリアンのアイデンティティ分析を行なった福岡安則の分析モデル（もともとはニンミ・ハトニックがイギリスのインド系移民のアイデンティティを考察するために考案したもの）が援用され、「日系米人・日本人の被抑圧への歴史への重視度」と「アメリカ社会への愛着度」という2つの座標軸のなかで占める位置が考察される。そして、最後の結論として、「松本亨という人物の『根無し草』的あり方を、積極的にとらえ、静的で固定的な国籍や民族という枠組みを越えた地点において再評価すること」に、松本亨を取り上げる今日的意義を見出

している。

上記の内容要約を踏まえたうえで、本論文の長所を挙げれば、本論文が松本亨を再評価する本格的な研究である点がまず評価できる。在野の実用英語の教育者というステロタイプな評価に制約され、従来あまり学術的な光が当てられなかった松本亨という人物を俎上に乗せ、日米の狭間に生きた彼の生涯やそのアイデンティティ、あるいは彼をめぐる国際関係を正面から考察しており、松本亨という個人の初の伝記として、または日米関係を背景とした初めての本格的な松本亨論として、一定の完成度で仕上がっていると言える。日米交流史のみならず、日本のキリスト教史や英語教育史上での貢献も認められる。

次に、多数の資料に依拠した実証的な論証である点も評価に値する。松本亨というマージナルな人物とその時代を、日米の多くの一次資料や、生存する日米の関係者からのインタビュー等に基づいて、実証的な手法で描き出している。具体的には、アメリカではメリーランド大学図書館などにおける保管文書、日本では外務省外交史料館、国立公文書館、陸上自衛隊衛生学校医学情報史料室「彰古館」、明治学院歴史資料館、関係者の戸籍などの一次資料を数多く活用している。本論の冒頭で著者自らが「『実証性』を伴わない議論は、客観性を欠く」と述べたごとく、確実な資料を渉猟して行なうその実証手法は、なかなか手堅い。その結果として描き出される松本亨像は、単なる戦後初期の実用英語の教育者という従来の単純な人物像を超えて、日米関係史の節目節目に顔を出し、巧みな英語力を駆使して日本人の心性、とりわけ戦時期の行為によってアメリカ人にとっては理解不能な人種と思われた日本人を、アメリカ人と同じく人間である点をアメリカ人に訴えた人物であった。そのため松本亨はある時には日本人、とりわけ民主主義とキリスト教によって再建されるべき新生日本の代表的で理想的な人物として、熱い期待が注がれた。同時に、日本とアメリカという2つの国の間に引き裂かれながら、その境界に立って自らのアイデンティティを模索し、日本人としての自己を反芻してきた、一人の迷える人間でもあった。松本亨は日米間の政治・外交・文化の表舞台で華々しい活躍をしたわけではないが、このようにアメリカ在住時には日本人とみられ、日本に戻って来たらアメリカ人と扱われるような、国家の狭間で常に自己を問い直し居場所を探し続けた人物に対しても、伝記は十分に成立し、その時代における思索や生き方の軌跡が検証されてしかるべきであろう。トランスナショナリズムや多文化共生が叫ばれる現在、松本亨を取り上げた今日的な意義が窺われる。また、グローバル時代を迎えた現在、世界に向けて情報をいかに発信するかが常に問われるが、その点でも松本亨のケースは相互認識のあり方にまつわる有益な示唆を与えるかもしれない。

付言すれば、方法論面での寄与を心がけた点が窺われる。歴史学における実証的な分析手法を基本としながらも、副題に「国際文化学的アイデンティティ分析の試み」とあるように、国際文化研究科に提出する博士論文として、学際的視点を生かしつつ、国際文化学の展開を念頭においた分析が試みられている。松本亨を単に時系列で追って平板に描くのではなく、文化環境としての「場」や関係性のなかで論じることに意を用い、また文字資料だけではなく、映像等も駆使しながら、多面的な分析が試みられている。序章では、本論の構想全体に関係する限りでの国際文化学の研究成果が回顧され、達成成果に評価が加えられるとともに、終章では社会学者福岡安則の分析モデルを援用し、松本亨を在日コリアンのアイデンティティ分析から得られた知見と比較しつつ論じている。その試みが十分

成功したとは言えず、むしろ未熟なまま扱ったことへの批判もありうるが、いまだ「学」として形成途上にあると思われる国際文化学の学問的確立や方法論の再検討に多少なりとも寄与しようとする、著者の志向や意欲を読み取ることは可能であろう。

一方で、論文全体の内容は、たしかに松本亨に対する従来の像を打ち壊し、新たな人物像の構築を求めるものではあるが、論じ方として全編を貫く一つの軸を設定し、それを論証する形にすべきではなかったかとか、「松本亨の虚像と実像」という軽い週刊誌的な表題がこの論文のもつ学術的な価値を貶める結果にならないか、という批判があった。また、大部な論文を読みやすくするためには、全体の論の展開と合わせて各章節の調整が必要になるが、重複や用語の使い方などの点で、十分に整理されたとは言えない面も散見される。

本論文は可能性があれば、いずれ単行本の形で出版されることが期待されるが、これらの指摘の一部は、その際に修正されることが望ましい。ついでながら、巻頭に凡例、巻末に松本亨の年譜を置くと、理解の増進に寄与するであろう。

総じて、本研究科の博士論文審査規準に、そのテーマで書かれた外国の論文も広く渉猟していることや、若干の手直しで単著として出版できることが掲げられているが、その点、本論文はいずれも条件にかなうものであり、審査に当たった小委員会委員の総意として、博士論文として認定するに足る根拠があると判断した。